シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第14回
学校と非学校との間に

□大阪の電話ボックスにて

私が20代の頃、仕事で大阪に出張に行ったことがありました。泊ったホテルの部屋から、路上の公衆電話（死語）の電話ボックス（死語）が見えました。驚いたのは、そのボックスの全面に、ピンサロ（死語）のエロい（死語！）写真と電話番号が書かれたシールが、びっしりと貼られていたことです。

ひええ。大阪ってコワイ街やなあと思いました。ところが翌朝、そのボックスを見ると、昨夜まであったおびただしい数のシールがきれいに剥がされていました。ホテルを出て歩いていると、他の電話ボックスの中に、一生懸命シールを剥がしている人の姿を目にしました。なるほど。公序良俗のために働いている人なんだなあと感心しました。しかし、仕事を終えて、夜ホテルに戻ると、何とあの電話ボックスがまたおびただしい数のシールで覆われていました。見ると、その電話ボックスの中に、今度は一生懸命シールを貼っている人がいたのです。その時私はハッとしました。その人が、朝シールを剥がしていた人と同一人物に見えたからです。もし、同一人物ならすごいマッチポンプ。結果として、お金が2倍動いている。驚くと同時に、いろんなことを考えさせられました。もしかしたら僕らも仕事のための仕事をつくっては、何も考えずそれを処理することだけを繰り返しているのではないか。そんな身につまされる思いもしたものでした。

□「主体性が大事」と言いながら…

さてさて、話は変わります。学校とは、子どもたちが生き生きと主体的に学ぶ場であります。しかし、現場では、主体性をどう育てるかといったことをあまり真剣に議論する空気があるようには見えません。それより、学力を向上させる「手法」や、実績をあげるためのシステムの構築に議論が前のめりに展開されているように思います。

つまり、競争に勝ち抜き、目に見える「結果」を手にするために、校務分掌業務や教科指導に心血を注ぐのが教師の労働であ

って、主体性だの、生き生きとした学びだのといった「きれいごと」を議論するのはセンチメンタルでお気楽な人たちというムードが存在しているように感じるのです。

学校が、より太いプログラムを用意し、そのレールに生徒をのせていくことこそが、見える「成果」をあげることにつながり、それが親のニーズに応えることだと教師は言うかもしれません。でもそこには、画一性、一方向性、効率性といった、主体化と方向を異にするものが潜んでいることに私たちは注意する必要があります。

より強いプログラムが与えられたとき、それに耐えうるパワーのある生徒は、恐らくそのプログラムが何であろうと、それを乗り越え、かつ、主体的に学ぶ術も自ら手にし、勝ち抜いていくことでしょう。また、与えられるシステムに身を委ね学校生活をくぐり抜けてきた子どもたちは、「思考停止」しながら上手に順応していくかもしれません。でも、価値の強制や、物量とスピードに戸惑いや疑問を持つ子どもたちも存在するのです。そのような子どもたちは、そこで立ち止まることが許されない状況の中では、不適応者としてドロップアウトしてしまいます。

外の力を借りながら

学校がそういった、むしろ主体化を疎外する場としてクローズアップされる中で、子どもたちの主体性を伸ばし、生きる力を生み出していこうとする場が、学校の「外部」に多く生まれています。それは、フリースクールのような存在であったり、あるいは、草の根的に展開されている様々なイベントだったり。私は、そのような活動を一定に評価しつつも、ある種の疑問も抱いていました。

それは、そのような学校の外側にある「主体化」を行う場やムーヴメントが、公教育に対するアンチテーゼとして、あるいは、内向きな学校文化に対するカウンターカルチャーとして存在しているということに対する問題意識です。

私が岩田県立大野高校に勤めていたとき、子どもたちに共同生活を体験させ、主体性を育てる活動を行っているある方と話をする機会がありました。彼は、学校が理不尽な場であることによって自分たちの活動が担保される、という話をされました。

実は冒頭の、電話ボックスの話は、この時に思い出したものなんです。シールを貼る存在とそれを剥がす存在。そこには、ある種のマイナス方向の「共存関係」が垣間見えます。

でも私は、子どもたちをそういう二元論の中に追いやるならば、彼らは、学校と非学校の中で自分を使い分けて生きることをいや応なく迫られてしまうのではないかという懸念を抱くのです。

学校は「主体性」をどう育むか真剣に考える必要があります。それには、境界を取り払い、学校の外側にある主体化の場とコミットすることが大切です。『ティール組織』の著者F・ラルーの言葉を借りて言うと、それが「全体性（ホールネス）を取り戻す」新たな学校づくりになるのではないかと思います。